

## 「最期の言葉」

2016年03月02日

あるご高齢の女性が「先生、難しい本ばかり読まないで、こんな雑誌も読んでみなさいよ」と『文藝春秋』を貸し、以来毎月、回してくださった。彼女が転居され、久しく読んでなかったが、芥川賞受賞二作が掲載された3月号を買って、読んだ。文学的なセンスがないらしく、芥川賞受賞作には興味が持てなかったが、88人の「最期の言葉」を編集した企画は面白かった。ノンフィクション作家の柳田邦男氏は下記のように語っている。「人は『死』という限界状況に直面すると、全身に深く刻んだ『何か』が一気に凝縮されて出てくるというわけです。私たちが感動する『立派な死』や『最期の言葉』には、まさにその人の全人生、全人格が集約されているような気がします。」本当にそうだと同感する。考えさせられた4人の「最期の言葉」を紹介したい。牧師として、100人以上の最期の方々と言葉を交わし、お別れしてきたので、私の感想も書き加えたい。

漫画家の手塚治虫氏は60歳、胃癌で亡くなった。手塚氏は朦朧とする意識のなかでも仕事への執念はすごく、ベッドから起き上がろうとし「隣へ行って仕事をする、仕事をさせてくれ」という言葉が最後の言葉だったという。漫画を描き続けかけたのであろう。牧師は、死を受容するようにと促す言葉を言わなければならないことがある。牧師であった岳父が、医者から今夜にもと言われた時、妻に「牧師は言葉に生きている者だから、お父さんに言いたいことはありませんか」と聞きなさいと言った。妻がその言葉を言うと、死を悟った岳父はサインペンで多くの言葉を書き残した。「主に在りて平安 happiness」と書いた言葉は悲しむ遺族の大きな慰めになった。医者や家族はなかなか言い難いが、私は死の受容を求める言葉をしばしば語って来た。死を覚悟した時に、頑張らないで委ねる解放が与えられる。

マルチタレントで人気を博した青島幸男氏は奥さんが見舞いに来た時、喜び「そう、じゃー、ビールでも飲もうか」と言った。「ああ、ビールないのよ、明日持ってくるね」と答えると「あしたかア、明日じゃまにあわないんだよなア」というつぶやきが最後の言葉になったという。私が病院に見舞った女性は喜んで、娘さんに「冷蔵庫からビール持っておいで」と言われ、皆で大笑いした。死に逝く人がこんなに力があるのだろうかと思えるほどの力で、彼女は私を抱きしめた。手を握り締められ、お別れした人は多い。私ではなく、牧師職への信頼である。牧師であることの光栄である。

文藝評論家の江藤淳氏は66歳で自死された。遺言状には「脳梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる所以なり。乞う。諸君よ、これを諒とせられよ」と書かれていた。生命活動をしていた体が滅していくのが死であるから、滅んでいく醜態は避けられない。江藤氏の気持ちは理解できなくもない。私は在任中、教会関係で8人の自死者があった。辛い体験で、牧師であることが揺さぶられた。立派な死、きれいな死でなくともいいというのが、私の持論である。どんな死にも、その人の残すメッセージがある。これを受け止めるのが看取るということであり、残された者に生きる道が示される。

俳優の仲代達矢氏の妻で演出家の宮崎恭子氏は65歳で、夫より先に亡くなった。残されたメモには「幸せはうかうかと粗雑にすぎる。悲しみは心をきめ細かくしみじみと美しい」と書かれていた。このメモは仲代氏の芝居に重要な意味をもち、著書『遺し書き』に「死が生の意味を深めるように、かけがえのない人を失った悲しみは、見過ごしていたささやかな喜びの脈を掘り当てるとチカラをもたらせてくれたと思いたい」と書いているという。どの夫婦もどちらかが先に逝き、一人残される。日頃のささやかな幸いを大切に、悲しみの中で、喜びの脈を掘り当てたいものである。死は生を再生していく。